

# 新婦人しんぶん

## 新日本婦人の会目的

- ☆核戦争の危険から女性と子どもの生命をまもります。
- ☆憲法改悪に反対、軍国主義復活を阻止します。
- ☆生活の向上、女性の権利、子どものしあわせのために力をあわせます。
- ☆日本の独立と民主主義、女性の解放をかちとります。
- ☆世界の女性と手をつなぎ、永遠の平和をうちたてます。

## 今週の紙面

- 2面 女性ニュース/国会
- 3面 読者のページ/まんが/短歌
- 4・5面 Colabo たたき背景と問題/ジェンダーリレー講座/ホットライン
- 6面 おからをおいしく/母の歴史
- 7面 新婦人のページ/G7広島サミットに向けて要請/学ぶ・育つ



新日本婦人の会は国連に認証されたNGOです



砂漠でラクダを放牧中、メッカに向かってイスラムの祈りを捧げる。2009年。パルミラ郊外の砂漠にて (写真は小松由佳)

草原や砂漠を旅する中で出会ったシリア人男性と結婚し、シリア難民の今を伝える写真家の小松由佳さん。トルコ・シリア大地震から3カ月、人々の暮らしはどうなっているのか。6月にはトルコの被災地へ向かうという小松さんに聞きました。

フォトグラファー

## 小松由佳さん



— 高峰K2に登頂した登山家の小松さんが、なぜ

風土とともに生きる姿

# 人々の暮らしや家族の変遷、そして未来… シリアを撮り続ける理由

写真家の道に？

小松 高校時代から登山に魅せられ、いつしかヒマラヤの山にあこがれました。K2の際どい経験の中で、ただ生きていることの尊さをすごく感じられるようになって、厳しい登山を求めなくなっていました。その中で輝いて見えたのが、ヒマラヤの谷で生きている人たちの暮らしでした。

壊される日常を 目の当たりにし

— そこで出会ったのが、パートナーですね。

小松 そうです。シリア中部のパルミラで、ラクダの放牧業を営むアブドゥルラティーフ一家と出会い、その一人が後に夫となるラドワンでした。K2登頂から2年後の2008年です。以来、年に1、2度一家を訪ね、写真撮らせてもらいまし

た。その頃は、ラクダや

家族、砂漠など牧歌的な写真を撮っていました。それが2011年以降、

長期独裁を行うアサド政権に対し、民主化を求める市民の運動がおこり、

政府軍と反政府軍の武力衝突へと発展するなかシリア情勢は大きく変化して

いきました。民主化デモに参加した兄が逮捕されたり、家族がバラバラ

になっていくのを見てすごくショックでした。

翌年に、ダマスカスで出会ったイギリス人のジャーナリスト、ジョンと

いう写真家が、「カメラは銃より強い。写真は、人々の心、人生を変え、

世論になって、世界を変える」と話してくれました。

内戦状態になっていく中での人々の暮らしを記録し、伝えたいと、難民の取材を始めました。

## 自分自身の物語として

小松 自身、シリア人

の夫と生きていて、シリアでおきたことや、難民になった彼らのことは、自分の人生の一つの側面なんです。もっと知りたいたい、彼らに対して何ができるだろうという感覚です。長男が1歳になった2017年以降は、子ども連れでヨルダンやトルコなどのシリア難民を取材してきました。

子ども連れで行くと成長を喜んでくれたり、「写真撮るより子どもをちゃんと見なさい」と怒られたりしましたが、子どもが泣いていると知らない人があやしたり、オムツを替えてくれたり…。みんな子育てする文化があり、多くを母親の責任にされやすい日本よりずっと子育てしやすいと思いました。子どもたちにとって、シリアの難民と接することは、自分のルーツに触れることでもあると思うのです。シャッターチャンスが限られたり、子連れの取材はパニックの連続ですが、子どもたちは行くたびにシリアというルーツに触れ、たくましく成長しています。

〈2面〉

2009年、日暮れ時、涼しい中庭でくつろぐアブドゥルラティーフ一家。左端が父親カーセム。最後列がラドワン(現在の夫)。女性たちは撮影されるのを嫌がり、その場から離れた



こまつゆか 1982年秋田県生まれ。2006年、世界第2位の高峰K2(8611m)に、日本人女性として初めて登頂。2018年よりシリアの撮影、2012年から内戦・難民の取材を始める。著書に『人間の土地へ』(集英社インターナショナル)など。現在、シリア人の夫と2人の子とも東京在住。(ホームページ「小松由佳 ウェブサイト」で検索)

